

世界の片隅の人間

野澤朋子

生きる場の条件を、子どもは選べない。誰の子どもに生まれたか。どんな社会に生まれたか。どんな身体で生まれたか。そして誰と出会ったか。その子の人生を支配しているのは、偶然と、命の持つ不思議さである。

子どもは、その時々の中の、まわりの人との関係の中で、自分の居場所を作る。人間という生命は「社会的文化的胎盤」〔大田堯自撰集成4―ひとなる 教育を通しての人間研究〕藤原書店〕の中で、学びながら変化する自己更新の過程として存在する。そうであるなら、胎盤となる社会、文化、人との関係の中に、子どもをとらえたい。

近代化で豊かになったはずの社会で、今、人はどう生きていくのだろうか。人間に限らず、あらゆるものを手段化する管理システムの眼差しに慣らされていけば、社会は人間にとって非人間的なものになる一方だ。しかし、人は人間であるがゆえに、非人間的なものに徹底して適応することはできない。違和感を持ち、はみ出す者が必ず、出る。そんな人た

ちは、どんなところに、どんな形で居場所を作るのだろうか。捜索は、死者の記憶の中にも及ぶだろう。今を見る目を持つためには、昔を見ることが必要になる。破壊してきた暮らしを見なければ、もはや私たちは、なにを失ったかわからない。そこには、今の私たちに伝えられるべき居場所づくりの知恵も哲学もあるはずだ。

この世界の片隅に、生き難さを抱えた人間が織りなす悲喜こもごもの姿が、見い出されるだろう。それらはすべて、居場所を作り生きていく時の、手掛かりだ。そんな問題意識から、作品を読んでみたい。困難さを糧とし、この世界の片隅でサバイバルしている子どもたちの姿を、作品の中に追ってみたい。

●貧困の中の闘い

高橋秀雄『地をばう風のように』（福音館書店）のクウゾウは、貧乏な家の子どもだ。学校では、クウゾウがどうに